

a 学校教育目標	学びあい、思いあい、高めあいのできる児童の育成「三愛」	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】(自校の使命) 友達と学びあい、思いあい、高めあう児童の育成 【ビジョン】(自校の将来像) 行きたい 行かせたい 行かせてよかった学校
----------	-----------------------------	----------------------	---

評価計画				自己評価					改善方針		学校関係者評価			
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	9月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方針	l 評価			m コメント
					h 達成値	h 達成値					イ	ロ	ハ	
確かな学力の向上	確かな学力を身に付けた児童の育成	◎主体的・対話的で深い学びの実現により確かな学力を育成する。 ○算数科を中心とした「見方・考え方」を働かせ、「問い」を解決する授業づくり ・つけたい力とゴールの明確化 ・追究したくなる問題提示、児童主体の課題設定 ○数学的な見方、考え方を育てる問題解決学習 ・「問い」がつながる単元構成(・繰り返し学習の徹底) ・すべての児童が学びを活用し、表現する場を設定 ・R80を活用した授業改善と学びの振り返りの共有 ○UDLの視点を取り入れた授業改善 ・学習者の視点で学びの障害を取り除く ・多様な選択肢と自己決定の場の提供 ・自分にあった学び方で学習し、自ら学ぶ「学びのエキスパート」の育成	①単元末テスト「知識・技能」の平均正答率 ②単元末テスト「思考・判断・表現」の平均正答率 ③R80による振り返りを通して自己の成長を実感できた児童の割合 ④「UDLの視点を取り入れた授業改善を意識することができた」と回答している教師の割合 「自ら進んで学習に取り組むことができています」と回答している児童の割合	①1・2年 85% 3年以上 75% ②1・2年 75% 3年以上 70% ③90% ④どちらも 90%	①1・2年 85.7% 3年以上 83% ②1・2年 78.7% 3年以上 71.9% ③83.3% ④教師 100% 児童 88.5%	①1・2年 86.9% 3年以上 80% ②1・2年 79.7% 3年以上 67.6% ③89.1% ④教師 88.9% 児童 90.9%	①1・2年 102% 3年以上 107% ②1・2年 106% 3年以上 96.5% ③99% ④教師 98% 児童 101%	①A ②B ③B ④B	①目標を達成することができた。前回の数値に比べ、1・2年生の達成値が少し向上した。一方で、3年生以上の達成値が低下している。目標値を達成してはいるが、個々への取組や学年ごとの知識・技能の定着を図るための取組をさらに充実させていく必要がある。 ②1・2年生は目標を達成することができたが、3年以上は達成することができなかった。思考・判断・表現の力を付けるため、校内授業での研修等も重ねたが、そこでの学びを自己の授業改善につなげる具体的な方策が十分ではなかった。 ③目標を達成することができなかった。前回と比べると、肯定的回答をした児童は約6P増加した。教師アンケートで「振り返りが児童の成長につながるよう声かけや指導をすることができたと思う」という肯定的回答も54.6%から80%は向上しており、日常的な指導が児童の意識の向上にはつながっている。引き続き、R80の振り返りの内容の質の高まりを促していく必要がある。 ④教師は目標を達成することができなかったが、児童は目標を達成することができた。「自己選択」自己決定の場を設定することを意識して授業改善にあたり職員が多かったが、「UDLの視点を取り入れた授業改善」についての理論研修が十分できておらず、解釈が十分できていないという意見もあり、数値は低下した。	①授業改善について、校内研修をより充実させていく。実際の具体的な取組を示したり、交流したりして場が十分取れていないので、今年度末や来年度に向けて、計画を立てていく。 →学習補充の在り方について校内で検討していくことに合わせて、年間を通して単元末テストの結果をもとにした分析・改善のサイクルを促すようにしていく。 ②子供たち全員が参加する授業を目指していくことを継続していく。「思考・判断・表現」の力が付いた児童の姿や言葉を具体的に考えるような校内研修を行う。一校区内での取組や学年での取組の振り返りと見直しと児童の実態についての見取りというサイクルを確立させていく。 ③R80による振り返りの内容を高めるための校内での意識の統一を図っていく。児童が自己の成長を感じ取れるような意識づけを促す具体的な評価の仕方を交流する場を定期的にとるようにする。また、R80の振り返りについては担任が実際に書き、どんな内容を求めているかを意識した授業改善につなげる。 ④目指す児童の姿を教職員だけでなく、子供たちとも共有するために教職員がまず目指す児童の姿を共通認識する場や手立てが必要。→「主体的・対話的で深い学び」をする児童「学びのエキスパート」としての児童の姿をより明確にして、「UDLの視点を取り入れた授業改善」を進めるための具体的な手立てを研修部から提案していく。	○	○	○	・達成できなかった項目の原因の究明と改善方策は、しっかりとできていると感じる。新年度から少しずつでも改善できることを期待している。 ・「自己評価」「改善方針」共に、要点をしっかりと押さえていると感じることが出来た。特に「授業改善」についての研修を重ねたり、教師間の交流・問題意識の共有に努められている姿勢は重要である。すでに結果が見えるというものではないが、取組の積み上げの中で、児童が低学年から高学年に推移していく中で「授業への向き合い方」の一貫性という意味から良い影響を与えてくれていると思う。 ・全クラスを参観して、返事がよくできていた。良い印象を感じた。児童が静かになるまで教師が待ち、児童もそれに気づいている様子が見られた。 ・先生が、児童の意欲的な動き(ききたい、やりたい、しゃべりたい)をよく認めていた。 ・児童と一人一人に対して、丁寧な指導をしてくださっていて、ありがた。
豊かな心の育成	潤いと落ち着きのある児童の育成	◎目標達成のため、自ら挑戦し、仲間とともに粘り強くやりぬく力を育成する ①学級・学年・児童会としての意識を高める集団づくり ・学校行事・児童会行事を活用した目標・手立ての設定と振り返り ・がんばりを認める場の設定 ・縦割り班活動の活用 ②「気持ちの良い学校」づくり ・児童会活動とリンクさせた生活目標の設定 ・「あいさつ」と「掃除」による明るくきれいな学校づくり	①「自分にはよいところがありますか」に肯定的回答をした児童の割合 ②「あいさつ」「掃除」の振り返りで肯定的評価をした児童・教師・保護者の割合	①85% ②90%	①79.2% ②「挨拶」児童 82.4% 教師 78.5% 保護者 61.6% 「掃除」児童 88.2% 教師 82.2%	①76.6% ②「挨拶」児童 83.2% 教師 60.0% 保護者 57.6% 「掃除」児童 89.5% 教師 80.0%	①90.1% ②92.4% 教師 70.6% 保護者 67.8% 「掃除」児童 99.4% 教師 88.9%	①B ②C ③C ④B	①目標を達成することができなかった。児童会が中心となり、お互いのよさを認める活動や絆づくりの取組を行った。また、行事を通して、異学年のよさを認める場の設定も行ったが、児童の自己肯定感の高まりがみられなかった。 ②挨拶についても目標を達成することができなかった。児童会が挨拶に関わる取組を行ったり、4年生から出た挨拶を広げる取組を全校に広げていったりしたが、保護者や教師の評価は、目標値を大きく下回ってしまった。掃除についても目標値を下回った。児童の評価は、ほぼ目標値を達成することができたが、教師の評価は目標値を下回ってしまった。6年生が中心となり、縦割り班掃除を行ってきたが、一部の児童が掃除場所に行かなかったり、掃除をせずに遊んだりしていることが原因となってしまった。	①児童の自己肯定感を高める取組として「成長ノート」に取り組んでいく。自らの成長をノートに書き留め、担任が認めていくことにより、自己の成長を感じ取らせたい。また、個の頑張りや学級や学年・学校全体で紹介したり、学級活動の時間に取り上げたりするなどとして、一人ひとりの自己有用感や自己肯定感を高めていく。 ②挨拶については引き続き指導が必要である。児童会や子供たちの意見を取り入れた取組を中心に進めていく必要がある。教師や地域の方に自ら挨拶をする児童も増えてきているため、肯定的な評価を積極的に行うことを根強く進めていきたい。また、家庭や地域にも挨拶に課題があることを伝えることで、家庭・学校・地域が連携して子供たちに挨拶をする心地よさや大切さを実感させていきたい。 掃除については、6年生を中心に意欲的に掃除に取り組む児童が増えてきている。掃除をしない一部の児童に対しては、引き続き指導を行うとともに、掃除をしない児童に他の児童がつけられることがないように、掃除の大切さや掃除をする意義を子供たちと共に考えていく。	○	○	○	・「豊かな心の育成」の改善策の中で述べられている児童一人ひとりの「自己有用感」「自己肯定感」を高めていくという方向性は重要である。 ・自己肯定感の育成として「頼りにされる存在」はどうか。例えば防災教育の中で、中学生の地域での役割を考えることなど、いろいろな面で頼りにされる年代になってきたから、頑張っていくという声かけ。 ・大人とのやり取りの中で、励ましの言葉などがあることで、児童の自己肯定感を高めることができるのではないか。 ・児童が「挨拶した」と肯定的に回答したとしても、相手を意識していない、相手に伝わっていないものは、他者からの評価が下がる。 ・他者からの肯定的評価を伝えることで、相手も自分も気持ち良く良くなる行為だと気づいてほしい。「ありがとう」や「ごめんさい」が言える自分から挨拶ができる児童に育ってほしいと願っている。
健やかな体の育成	生涯にわたり心身ともに健康で安全な活力ある生活を送るための基礎的実践力の育成	◎自分の健康に関心を持ち、健康課題を自ら解決していくこととする態度を育成する ①基礎体力の向上・運動が好きな児童の育成 ・体カテストの実施による課題の分析と指導の改善 ・体育の授業の工夫 ・外遊びの推奨の奨励と朝マラソンの実施 ②計画的・意図的な食育指導・給食指導の実施	①運動やスポーツが好きな児童の割合 ②自分で決めた量を食べきろうとする児童の割合	①90% ②90%	①84% ②90%	①81% ②91%	①90% ②101%	①B ②A	①目標を達成することができなかった。「ロング休体」に活発に外遊びをする様子が見られることや、体カテストの結果から、体を動かすことが好きな児童は多いことが分かった。職員対象にアクティブチャイルドプログラム研修を実施したことで、全職員が「運動が楽しい」と思える児童を育てることを意識することができた。また、児童会で全校遊びを企画・運営したり、マラソン大会では走る距離を児童が選択・決定したりすることで意欲的に体を動かそうとする児童が多くなった。しかし、冬にかけて気温が下がり、体を動かすことへの意欲が低下した児童もいたと考えられる。 ②目標を達成できた。配膳の初めに給食を食べる量を調整する時間を設定し、「自分で決めた量を食べきり」経験を積むことができるようにした。また、毎月19日の食育の日の全校指導と各学年での栄養教諭との連携授業、「うまいぞ!みはら給食」での地場産物や生産者の紹介などの取組が、食べることへの感謝の気持ちを持ち、自分で決めた量を食べきろうと意識した児童の姿につながったと考えられる。	①今年度同様、年度当初からアクティブチャイルドプログラムの取組を全校で確実に、適宜職員間で、各学級で取り組んでいるアクティブチャイルドプログラムを交流することで、職員が継続的に指導する意識をもてるようにし、児童が運動することが楽しいと感じられるようにする。冬季はマラソンカードやなわとびカードを活用するなどし、休憩時間も進んで楽しんで外に出て、運動することができるように仕組んでいく。 ②引き続き、食育の日や栄養教諭との連携授業を行い、食べることに感謝して自分で決めた量を食べきろうとする意識を高めていきたい。また、共同調理場と連携し、給食の調理の様子を教えたいたり、保護者にも学校での食育について発信し連携し、できるようにしていく。	○	○	○	・運動好きな児童を育てることが大切であると思う。そのためには、まず、先生自身が運動に親しむ姿勢が大切ではないだろうか。児童と一緒に遊ぶ機会を意図的に設けてはどうか。 ・運動好きになる機会が増えれば地域のスポーツクラブに入学し、活動する児童も増え、ますます児童の体力が向上すると思う。 ・最近の児童は偏食が多いと聞く。本校の取組から、給食について理解を深めようとしていることが伝わる。給食に親しむを持たせるために、家庭でも給食のメニューを作って食べる取組も効果的ではないだろうか。
信頼される学校	保護者・地域とともに歩む学校の推進	○不祥事防止の徹底 ○地域とともにある学校の創造 ○教職員が健康でやりがいをもって勤務できる環境づくり	①不祥事防止研修の実施(月1回以上) ②「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いませんか」に肯定的回答をした児童の割合 ③時間外勤務45時間以下の月が6ヶ月以上の教職員の割合	①100% ②85% ③100%	①100% ②88.5% ③88%	①100% ②85.7% ③84%	①100% ②100% ③84%	①A ②A ③B	①目標を達成できた。(100%) 不祥事防止研修の担当を学年で分担し行うことで、不祥事に対する意識向上につながっている。研修にロールプレイや意見交換を取り入れ自分事として捉えられるようにしている。 ②目標を達成できた。(100%) コミュニティスクール開始に当たり、年間4回の運営協議会を計画的に実施し、話し合いを進めた。コミュニティスクールを活用して、どんなことができて、各学年・各分掌で出合った。実際には、6年生以外、学校林に関わり、フォレストサポートを活用した取組ができた。地域の方に、2年生は野菜作りの仕方を教わったり、マラソン大会に向けて、掃除を5年生と一緒にしていたり、当日の監視をお願いしたり。5年生は、地域のために活動されている方々(フォレストサポート、登下校の見守り、コミセンなど)の思いを聞く機会を設け、自分たちでできることを考える。 ③目標を下回った。(84%) 時間外の在職等時間が45時間以下の月が基準に満たない教職員は4名であった(4~12月)。中間と比べて、時間外勤務が月45時間以上の職員が増えたが、全体的に悪化したわけではない。その4名以外は、45時間以上の月は、0に近い。学年部で仕事を計画的に行い、そろって帰る姿をよく目にした。 成果の果れた取組→放課後の時間の確保、成績等に係るスケジュールの提示、成績等に係る作業日の確保、週1回の学年会の実施、曜日によって退校時刻を決めて30分前に声をかけ進捗状況などを把握、AIを含むICTの効果的活用。	①今後も不祥事防止委員会などにおいてヒヤリハット事案を出し合い、具体的に沿った協議をし、未然防止に努める。 ②来年度以降のようなことが具体的にできそうか話し合っていく。地域の人材化も含め、各学年の年間指導計画位置付けていく。また、作成した、年間計画に、年度途中でも追加・修正していく。 ③職員一人一人の意識改革を行いながら、業務改善をさらに進める。成績処理について、見直しをもち、計画的にできるように、3学期末までのスケジュールを細かく提示している。適宜声をかけていく。会議などの持ち方を検討。しかし、指導力向上のため、意識統一のために必要な研修の時間は確保していく。	○	○	○	・今後は、CSの成果などが分析として提示されるとよい。 ・CSの活動を通して、どのようなことができて、各学年や各分掌で考えられたことが形になってきたんだと感じている。各教科等での枠組みで、どの学年で、何をやるのか。それで、どのような力を育てたいのか、整理をする。持続可能な仕組みができると考える。 ・各保護者が得意とする分野でCSの運営に参加できるようにPTAからの働きかけも必要である。

本年度の重点目標については◎印で示す。

【j:自己評価 評価】

A:100≦(目標達成) B:80≦(ほぼ達成)<100 C:60≦(もう少し)<80 D:(できていない)<60

【l:学校関係者評価 評価】

イ:自己評価は適正である。ロ:自己評価は適正でない。ハ:分からない。